

とく
徳

ほう
朋

ぶつぼうちようもん
仏法聴聞

くろはぎ まさみ
黒萩 昌



くろはぎ まさみ
1956—現在
北海道生まれ。真宗大谷
派法誓寺住職。

ぶつぼうちようもん
仏法聴聞ということは、難しい仏教用語を一生懸命勉強するということではありません。
私の身の事実、私の罪深さ、自力無効じりきむこうを教えてもらう歩みなのです。罪深くもないものに、無理やり「罪深いと思え」という話ではありません。ただ我が身の事実を知らなさいという教えなのです。私たちは自分自身を色々なもので飾って生きています。ぶつぼうちようもん
仏法聴聞ということは、その飾りが一枚一枚はぎとられていくことです。そして全部はぎとられて最後の最後に残るのが、「罪悪深重煩惱熾盛ざいあくじんじゅうぼんのうしじょう しゅじょうの衆生」という私の事実なのです。そしてそのような私を「たすけんがための願」こそが弥陀みだ ほんがんの本願です。

「罪悪深重煩惱熾盛ざいあくじんじゅうぼんのうしじょう しゅじょうの衆生」というところに立つことができた時、私たちの頭が下がる。このことを私たち真宗門徒は「頭の上がりようのない世界をいただく」と言ってきました。その「頭の上がりようのない世界」を「自覚」において私たちの上に開いてくれるはたらきが如来の本願なのです。頭の上げようのない広大無辺こうだいむへんの広い世界に出させてもらうのです。夫に妻に頭が下がり、我が子、我が親に頭が下がる。そして一切衆生いっさいしゅじょう、我が人生まるごとに頭が下がっていく時をもらうのです。

「なごりおしくおもえども、娑婆しゃばの縁えんについて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまい

るべきなり」。これが親鸞聖人のご信心の世界です。やはり名残惜しいのですね。真宗はこの人間の弱さや情を否定しません。人間の弱さや情をそのままにして人生に対する心からの満足と、頭の下がる世界を与えてくれるのです。もし「自分はこの娑婆に何の未練もない、いつ死んでもいい」と言う人がいるとしたら、その人はせっかく人間に生まれながら、名残惜しい別れがたいと思う人に一人も出会うことが出来なかったということです。大事な人と出会っていればこそ、その人との別れが名残惜しいのです。であればこそ、名残惜しいという心そのままにして生死を超えていく道が私たちに必要なのでしょうか。私たちは本当にその道がほしいのです。真宗の教えはその道を自覚において私たち一人ひとりに与えてくれます。私たちは「南無阿弥陀仏」と仏の名を呼び、念仏申して本願のはたらきに照らされていくのですね。そして照らし出された「罪深く愚かな」身の事実に、「その通りでした。これが私でした」とうなずく。これを自覚と言います。その自覚のためには材料がいます。照らし出されてうなずくには材料がいます。そしてその自覚の材料は私たちにはたくさんあります。私たちは元来「わがままで身勝手に自分のためにしか生きることの出来ない」存在です。その根性を理性で何とか抑え込んでいるつもりですが、実は日常生活の中に無意識のうちに限りなく漏れ出ているのです。その漏れ出ている根性が私たちの自覚の材料です。私たちが自分自身に目覚めるための材料は、日常生活の中に宝の山のようにたくさんあります。



(『ごまかしのきかない人生』)

この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

